

飯田下伊那地域における病原体検出サーベイランス事業について

藤本和子、小林貞子、込山茂久、佐々木隆一郎（飯田保健所）、宮島勲（諏訪保健所）

要旨：飯田保健所では、管内の感染症予防対策の資とすることを目的に、平成7年度から「病原体検出サーベイランス事業」を実施している。この事業では、飯田下伊那地域における病原体の検出状況を月報でまとめ、医療機関等に提供し、情報の共有化を図っている。本報告では、これまでの調査結果から、糞便由来のサルモネラ属菌とカンピロバクターの検出状況等についてまとめた。その結果、感染症法により実施されている「感染症発生動向調査」のみでは得られない地域の情報を得られることが分かった。また、この事業は、健康危機管理の一環として、感染症発生動向調査を補完する事業として位置付けることができると考えた。

キーワード：病原体検出サーベイランス、サルモネラ属菌、カンピロバクター、健康危機管理

A 目的

飯田保健所では、平成7年度から管内の感染症状況を把握する目的で、「病原体検出サーベイランス事業」を実施している。この事業では協力医療機関等からの報告を基に、病原体の検出状況を月報でまとめ、医療機関等に提供している。

平成11年に「感染症の予防及び感染症の患者の医療に関する法律」が制定され（平成15年改正）、地域の感染症の状況を把握するために「感染症発生動向調査」が全国で開始された。この法に基づく調査により、感染症の情報と共に病原体の情報も広く、正確に把握されるようになった。

飯田保健所では、平成17年度に、本事業の見直しを行い、地域の感染症の発生動向をより細かく把握することができるようになった。

そこで今回は、近年増加傾向がみられる糞便由来の病原体に注目し、サルモネラ属菌とカンピロバクターについてまとめたので報告する。また、本事業が「感染症発生動向調査」を補完することができるかどうかについて、若干の考察を行う。

B 病原体検出サーベイランス事業の概要

① ヒト由来病原体調査定点

平成7-16年度：4病院、3検査機関

平成17年度：4病院、1検査機関

定点病院病床数：1,242床（管内病院の64.8%）

② 調査期間：平成7-17年度（月報として集計）

③ 糞便由来の対象病原体：16病原体

（病原大腸菌、赤痢菌、黄色ブドウ球菌、チフス菌、パラチフスA菌、サルモネラ属、エルシニア属、コレラ菌、ビブリオ属、エロモナス属、プレシオモナス、カンピロバクター属、クロストリジウム属、バチルス属、赤痢アメーバ、ロタウイルス）

④ 病原体確定検査：サルモネラ属菌等の血清型別検査（定点からの依頼により保健所が実施）

⑤ カンピロバクター陽性者調査

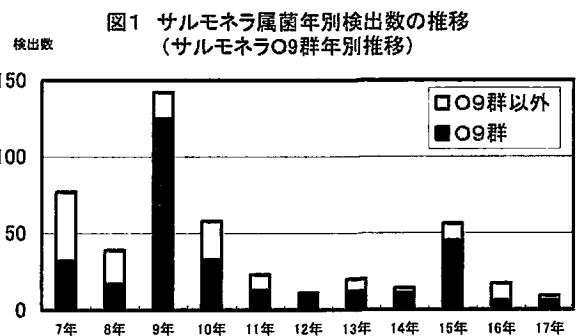
対象：平成14年から17年の陽性者

調査項目：年齢、性別、地域別等

C 結果

① サルモネラ属菌について

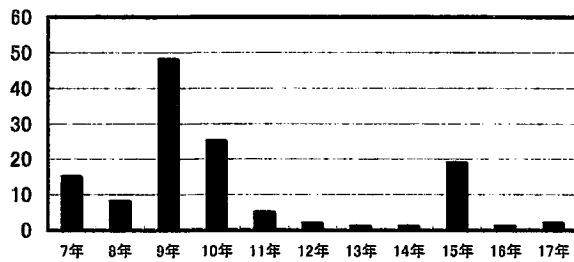
サルモネラ属菌及びサルモネラO9群の年別検出数の推移を図1に示す。



サルモネラ属菌は、平成7年から平成10年までは検出数が多く、平成11年から17年までは平成15年を除いて、少ない状況であった。平成9年は、検出数142件で、事業を実施した10年

間では最も多い状況であった。サルモネラ属菌のうち検出数の多いO9群の年別推移も同様の推移を示した。サルモネラ血清型別におけるS. Enteritidisの年別同定数を図2に示す。サルモネラ属菌及びO9群の年別推移と同様な状況を示した。

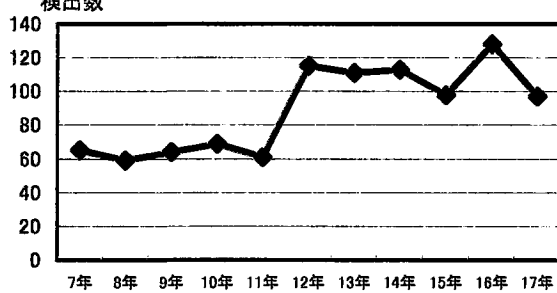
検出数 図2 S. Enteritidisの年別同定数



② カンピロバクターについて

図3にカンピロバクターの年別検出数を示す。

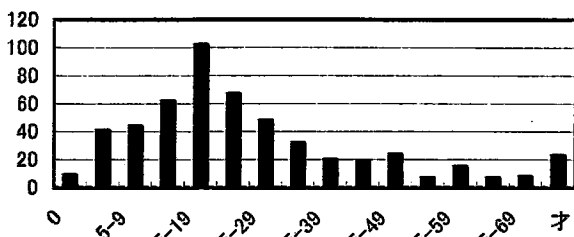
検出数 図3 カンピロバクターの年別検出数



平成7年から平成11年は検出数が少なかった。平成12年(115件)は、前年(61件)に比べ検出数が倍増し、以後平成17年まで多い状況であった。

図4に平成14年から平成17年までのカンピロバクターの年齢別陽性者数を示す。15-19歳にピークが見られた。また、10歳代と20歳代の陽性者数を合わせると全体の5割を超えた。男女比については、6対4であった。

人 図4 カンピロバクターの年齢別陽性者数



D 考察

① サルモネラ属菌について

今回の調査でサルモネラ属菌の検出数が非常に多かった平成9年には、S. Enteritidis (O9群)を原因とする大規模な集団食中毒の発生があった。その原因食品は鶏卵からの二次汚染によるものと推定された。

平成11年以降、サルモネラ属菌は減少を示した。その理由は、サルモネラ食中毒の発生防止のため、厚生省(厚生労働省)が平成11年に「鶏の卵についての表示基準、鶏の液卵についての規格基準」等の新たな法を施行し、指導が行われたためと考えられる。

しかし、平成15年には、S. Enteritidis (O9群)の感染症事例があった。この事例は、調査の結果、施設内で飼育をしていた鶏の糞による人畜共通感染症と推測され、流通鶏卵によるものではなかった。この事例から、家庭・学校等における飼育動物による感染症や食中毒対策が今後必要であると思われる。

② カンピロバクターについて

カンピロバクターは、近年、検出数が多い状況で推移している事が分かった。カンピロバクター感染症は、今後も市中感染症として重要な位置を占め、その対策が必要と考えられる。

カンピロバクター陽性者の調査では、男性が約6割を占め、年齢別では15-19歳が多く、10歳代と20歳代を合わせると5割以上を占めることがわかった。これらのことから、カンピロバクター感染症は、10歳代と20歳代の食習慣に何らかの原因があるのではないかと推測された。

E まとめ

糞便由来のサルモネラ属菌とカンピロバクターの検出状況のまとめから、「感染症発生動向調査」のみでは得られない地域の情報を得ることができた。「病原体検出サーベイランス事業」は、健康危機管理の一環として、「感染症発生動向調査」を補完する事業として位置付けることができると考えられた。

今後も、地域の医療機関の協力を得て、効率的に病原体の情報を把握し、地域の感染症予防対策に役立てるため本事業を継続していきたい。